□川崎哲也（画）・大場秀章（編）：**サクラ図譜**. B4. 222 pp. 2010. ￥23,810＋税. アボック社. ISBN: 978-4-900358-66-9 C0045.

2002年に亡くなられたサクラの研究者川崎氏が遺された図を整理したものである．第一部 (pp. 18–107) は彼が発表を予定していたと思われる10品種について，観察・記載文と共に，第二部 (pp. 110–199) はそれ以外のもの32種類について，故人のメモと共に記録されている．どの図にも，編者の細かいコメントがついている．

図は原画を80%縮小したものだが，見事な出来ばえという他はない．鋸歯やおしべや細脈などの小部分の拡大図は，驚くほど微細な描写である．学校教師，吹奏楽部指導，ホルン首席奏者などをこなした人が，調査研究の時間はともかく，これほど丹念な図を描く時間をどうやって持てたのか，我が身の能力の至らなさを見せつけられる．お目にかかった川崎氏は，ごく普通な人物にしか見えなかったのだが ...

巻末に植物画家の石川美枝子氏の「川崎先生とサクラ」と題する思い出話がある．また大場氏による「川崎哲也とサクラ研究」は川崎氏を主題としながら．わが国のサクラ研究を概説している．続く同氏の「川崎哲也先生の思い出」は，音楽でも共通な面をもつ二人の交流が述べられている追悼記である． （金井弘夫）

□東京電力株式会社（監）・高田研一（著）：**尾瀬の森を知る　ナチュラリスト講座**. A5. 206 pp. 2006. ￥1,800＋税. 山と渓谷社. ISBN: 4-635-17173-6 C0075.

副題に「知られざる南尾瀬の大自然」とある．南尾瀬とは聞き慣れない地名だが，冒頭の説明によると，いわゆる「尾瀬」の南を画する稜線，三平峠－富士見峠－鳩待峠の南側の山林を指し，尾瀬ヶ原の地主である東京電力の所有地である．この地域は戸倉から北東を占める片品川本流域約6,000 haと，戸倉から西へ分かれる笠科川流域約3,000 haに区別される．

最近は群馬県側から尾瀬に入るのに，鳩待峠経由のルートは登りがないために多く利用されているが，シーズン中は津奈木～鳩待峠間が一般車通行禁止となるため，入山者は戸倉でバスやタクシーに乗り換え，鳩待峠までは窓外の景色を流し見るだけで，舗装道路を楽々と通過してしまう．この笠科川沿いの山林は，坤六峠経由で水上に通じる県道と津奈木湿原が一般に知られている以外には登山ルートもなく，文字通り手つかずの原生的自然が残されているところなのだそうだ．

本書は2003年から三年間にわたって行われた調査の報告書である．著者はNPO法人森林再生支援センター(理事長・村田　源氏)の運営者．森林調査報告というと，フロラリストと植生調査の組成表が並ぶのが常識だが，本書には一つもない．9章より成り，1. クロベの森の謎，2. 不思議な小びとたちの森, 3. ダケカンバという生き方，4. ブナの森と「ブナボラ」，5. 山のかたちが森のかたちを決める, 6. 尾瀬の高層湿原を読み解く，7. お花畑の秘密，8. 南尾瀬の森の歴史，9. まとめにかえて，という表題から察せられるように，「森」とか「自然」とかを植生とか遷移という一般論で片付けないで，多方面からの自然の見方をトレーニングしようと意図している．特に，チェーンソーによる「皆伐」を前提とする近代造林の常識を，択伐というレトロな立場から見直そうとするものである．

クロベの森の謎では、クロベの子供はクロベの古株の上でしか育たないこと．その理由が種子の大きさや土壌や落ち葉の厚さや土壌菌との拮抗と共生，成長段階に応じた光要求の変化などと密接な関係にあること．基岩の種類や節理の方向による風化作用の違いが，植被の種類や育ち方に与える影響などが丹念に記述されている．

尾瀬の湿原の成立についても，定説にとらわれずに，独自の推理を行っている．とくに，津奈木のミズゴケ湿原にヨシの侵入が始まっているのに加えて，一部では泥炭層の分解が起っているのではないかという推理は，尾瀬ヶ原の今後を占う上で重大なヒントを含んでいる．尾瀬ヶ原でも最近はヨシの進出があちこちで見られ，とくに山の鼻田代の一部ではヨシが密生して，熊よけをかねて毎年刈り払いを行っている現状である．これが単なる「ヨシの進出」というよりは，温暖化に伴う泥炭層の分解による低層湿原化の前触れではないかとの危惧を，暗示しているように思われる．流行の定説にとらわれず，「こういう見方もある」ということを知れば，自然を見る目がさらに磨かれることだろう． （金井弘夫）